

肺内動脈シャントにより低酸素血症をきたした肝硬変の1例：コントラスト心エコー図法による検討

倉持 雄彦
泉 司郎
中山 和昭
太田 哲郎
島田 俊夫
村上 林児
盛岡 茂文
森山 勝利

Takehiko KURAMOCHI
Shiro IZUMI
Kazuaki NAKAYAMA
Tetsuro OHTA
Toshio SHIMADA
Rinji MURAKAMI
Shigefumi MORIOKA
Katsutoshi MORIYAMA

Abstract

A 62-year-old man with liver cirrhosis and hypoxemia was admitted to evaluate the etiology of hypoxemia. The patient had noticed exertional dyspnea for three years. Physical examination, laboratory tests, ultrasonography and liver scintigraphy revealed liver cirrhosis. The arterial blood gas test showed hypoxemia (P_{O_2} 46.3 mmHg). Chest roentgenogram showed old pulmonary tuberculosis and the pulmonary function test demonstrated decreased FEV1.0% and %DLco, which did not account for the marked hypoxemia.

Contrast echocardiography was performed by injecting hand-agitated saline into the antecubital vein. Three seconds after the right ventricle was opacified, the contrast echoes appeared in the left atrium and then the left ventricle. Pulmonary arteriography revealed no pulmonary arteriovenous fistula. Hemodynamic data showed low pulmonary vascular resistance. Contrast echocardiography by injecting hand-agitated saline from the catheter tip was performed at both pulmonary arteries and the left atrium was opacified by each injection. The hypoxemia was mainly attributed to a intrapulmonary arteriovenous shunt.

Although the etiology of hypoxemia in liver cirrhosis seems to be multifactorial, the intrapulmonary arteriovenous shunt is the most important factor. Contrast echocardiography was useful for detecting this shunt.

Key Words

liver cirrhosis, hypoxemia, pulmonary arteriovenous shunt, contrast echocardiography

はじめに

肝硬変症ではときに低酸素血症がみられることが報告されている¹⁾。その成因として肺内動脈シャント、門脈肺静脈シャント、肺拡散障害等がいわれている。今回、低酸素血症を呈した肝硬変患者において、その原因が肺内動脈シャントであることを末梢から

のコントラスト心エコー図法により証明した症例を経験したので報告する。

症 例

症 例 62歳、男
主訴：労作時呼吸困難
既往歴：1984年に、肝障害を指摘されている。

島根医科大学第四内科：〒693 島根県出雲市塩冶町 89-1

The Fourth Department of Medicine, Shimane Medical University: Enya-cho 89-1, Izumo, Shimane 693

Received for publication July 28, 1992; accepted December 9, 1992 (Ref. No. 37-236)

Table 1 Laboratory data

TP	6.8 g/dl	PT	13.0 sec
ALB	2.8 g/dl	aPTT	43.4 sec
T-Bil	1.4 mg/dl	HPT	44%
GOT	95 IU/dl	WBC	4,500/ml
GPT	39 IU/dl	RBC	466 × 10 ⁶ /ml
LDH	389 IU/dl	Hb	14.0 g/dl
Al-P	79 IU/dl	Ht	42.8%
γ-GTP	41 IU/dl	Plt	16 × 10 ³ /ml
ChE	498 IU/dl	CRP	<0.18
ZTT	29.6	FBS	90 mg/dl
TTT	18.7		
T-Chol	136 mg/dl	ICG R ₁₅	61%
TG	72 mg/dl	KICG	0.029 (>0.158)
BUN	12 mg/dl	HBs-Ag	—
		HBs-Ab	67.9%
		HBc-Ag	—
		HBc-Ab	87.4%

Table 2 Arterial blood gas analysis

pH	7.454
Pco ₂	34.5 mmHg
Po ₂	46.3 mmHg
HCO ₃	24.2 mmHg
BE	0.2
O ₂ sat	84.6%
A-aD _{O_2}	60.6 mmHg

Table 3 Pulmonary function test

TLC	6.79 l
VC	4.12 l
FEV _{1.0}	2.40 l
%VC	119%
FEV1.0%	59%
DLco	7.70 ml/min/mmHg
DLco/VA	1.26 ml/min/mmHg

家族歴： 特記すべきことなし。

現病歴： 1986年ころより、労作時に呼吸困難を自覚するようになったが、咳嗽、喀痰は伴わなかった。1988年11月に、慢性肝炎の疑いで他院に3ヶ月入院した。1989年5月、労作時呼吸困難が増強し、喀痰および咳嗽も出現したため当院を受診し、動脈血酸素濃度が51.5 mmHgと低酸素血症を認めたため、入院となった。喫煙歴は30年間で1日20本であるが、10年前より禁煙をしていた。飲酒歴はなかった。

入院時現症： 身長167cm、体重57kg、血圧142/80mmHg、脈拍68/min整、呼吸数18/min、口唇にチアノーゼ、四肢にばち状指を認めた。心肺聴診上異常所見を認めなかった。眼球結膜の黄疸は認められなかった。腹部では肝を3横指触知した。脾腫、腹水、手掌紅斑、腹壁動脈の怒張は認められなかった。神経学的には異常所見はなかった。

入院時検査所見： アルブミンの低下とグロブリンの増加、肝酵素の上昇と膠質反応の上昇がみられた。

またコリンエステラーゼおよびヘパプラスチンテストの低下、ICG停滞率の上昇、KICGの低値が認められた(Table 1)。

食道内視鏡では、食道静脈瘤を認めた。腹部エコーグラフィーでは脾腫は認められなかったが、肝右葉の縮小と左葉の腫大を認めた。

動脈血液ガス所見(Table 2)では酸素分圧46.3 mmHg、A-aD_{O_2}60.6 mmHgで、低酸素血症とA-aD_{O_2}の開大が認められた。肺機能検査(Table 3)では1秒率の低下と拡散能の低下が認められた。

胸部X線写真(Fig. 1)では、右上肺野に陳旧性肺結核の陰影を認める以外には所見は認められなかった。心電図(Fig. 2)では異常所見は認められなかった。

心エコー図検査では心筋疾患、弁膜疾患、心内シャント疾患は認められなかった。肘静脈からの生理食塩水と空気のハンドアジャテーションによるコントラスト心エコー図法を行った。コントラストは右房、右室に

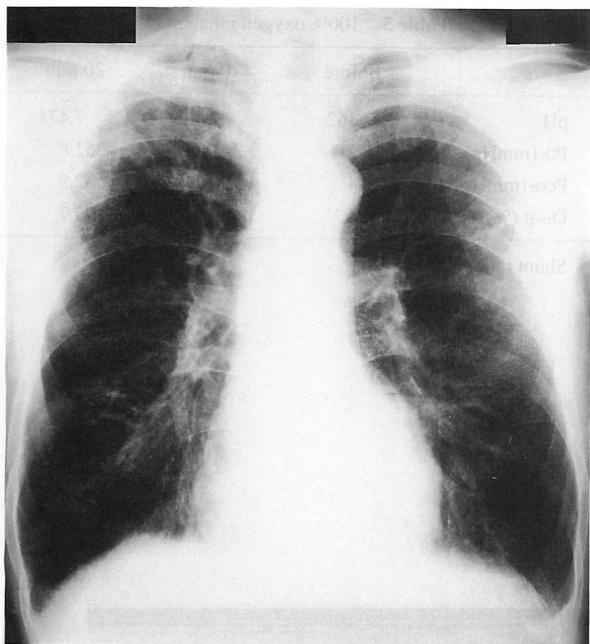


Fig. 1 Chest roentgenogram

Old pulmonary tuberculosis is seen in the right upper lung field. The cardiothoracic ratio is normal.

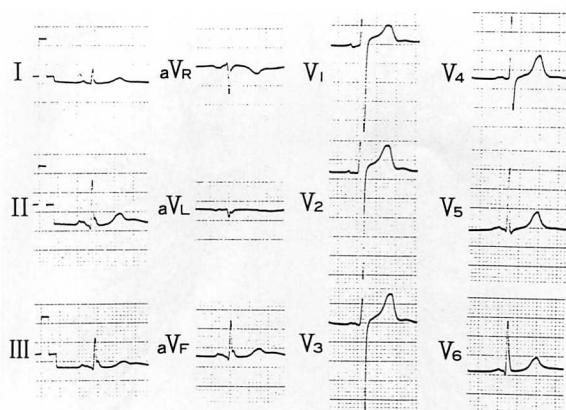


Fig. 2 Normal electrocardiogram of the patient
No abnormal findings.

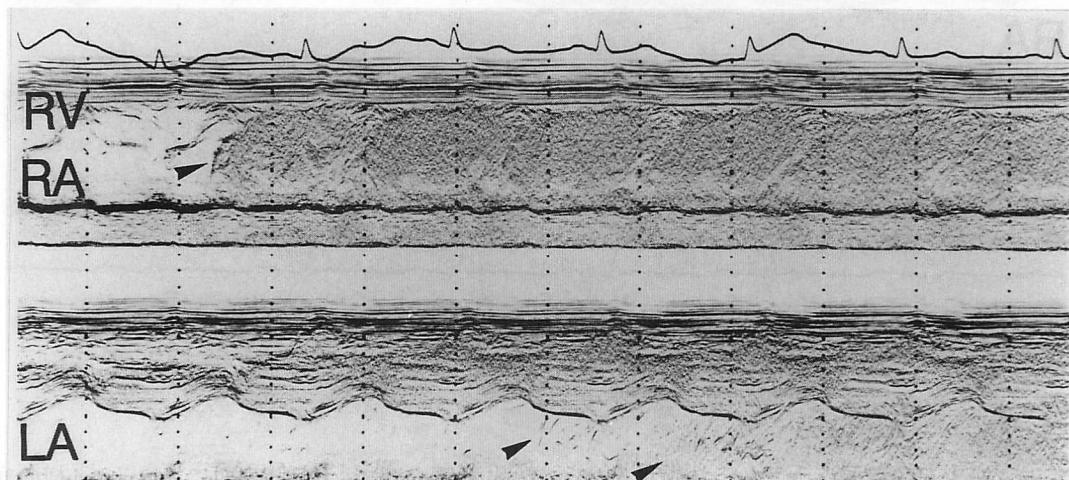


Fig. 3 Contrast echocardiogram after injecting saline into the antecubital vein

Contrast echoes are seen in the left atrium (arrows).

RV=right ventricle; RA=right atrium; LA=left atrium

出現した後、約3秒後左房に現れ、肺内動静脈シャントの存在が示唆された (Fig. 3).

右心系血行動態は心内圧には異常は認められず、心拍出量が7.61/minと高心拍出状態を示し、肺血管抵抗は低下していた (Table 4).

肺動脈造影では、肺動静脈瘻の所見は認められなかった (Fig. 4).

右心カテーテル検査時、左右上下の各肺動脈からコントラスト心エコー図法を行った。いずれの肺動脈か

Table 4 Right heart catheterization

PCWP	(8) mmHg
PA	22/9 (13) mmHg
RV	26/5 mmHg
RA	(4) mmHg
CO	7.64 l/min
CI	4.75 l/min/m ²
SV	99 ml
SI	63 ml/m ²
PVR	52.3 dyn·s/cm ⁵

()=mean

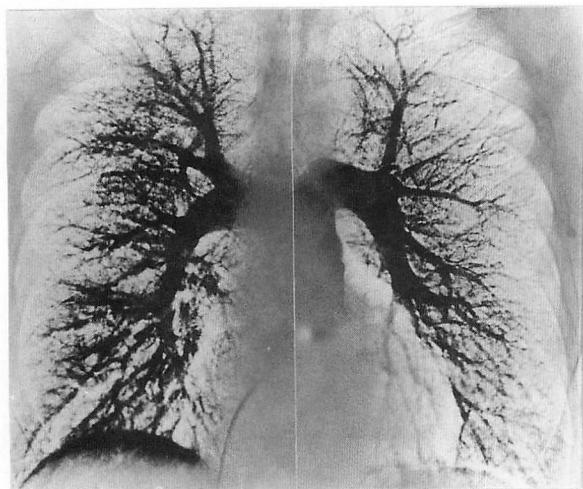


Fig. 4 Pulmonary arteriogram
There is no pulmonary arteriovenous fistula.

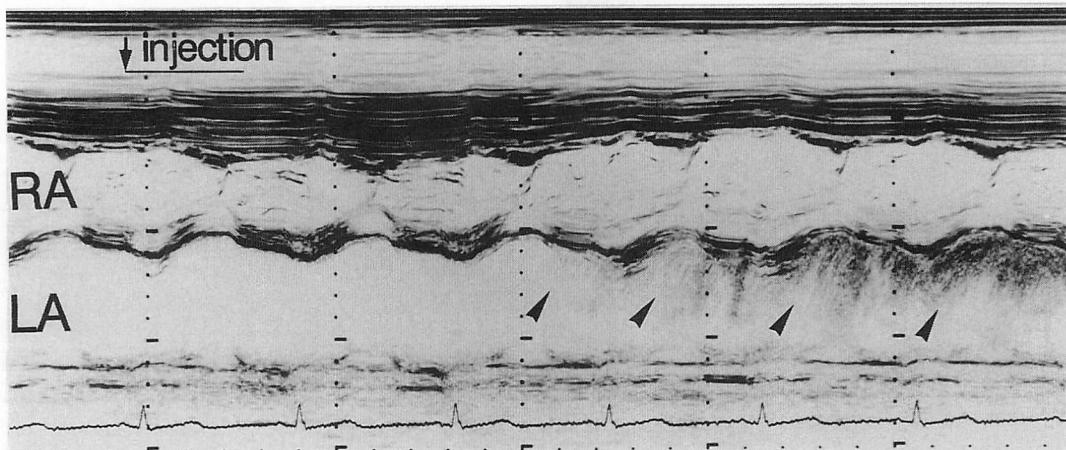


Fig. 5 Contrast echocardiogram after injecting saline into the pulmonary artery
Contrast echoes appear in the left atrium (arrows).
Abbreviations as in Fig. 3.

らの注入においても左房にコントラストが出現し、これにより、肺内動静脈シャントは全肺野に及んでいることがわかった (Fig. 5)。

100% O₂吸入により計算したシャント率は20%であった (Table 5)。

考 察

肝硬変症では、ときにチアノーゼがみられるることは19世紀末より知られており、1935年動脈血酸素濃度の低下がはじめて示された¹⁾。低酸素血症を合併した肝硬変の死亡例で、肺動脈に酢酸ビニルを注入し肺動静脈間の異常な吻合が多数みられたという報告がある²⁾。また肝硬変剖検例の肺動脈からゼラチンと

micropaqueを注入し肺表面にspider nevi様の病変が13例中6例にみられ、明らかな peripheral pulmonary AV shuntが1例にみられたとの報告³⁾もある。肝硬変では肺リンパのうっ滞や血管作動性物質の増加による肺の間質性浮腫を生じclosing volumeが上昇しているとされている⁴⁾。しかし hypoxemiaの程度とclosing volumeとは必ずしも対応せず、少なくともclosing volumeの上昇だけで著明な低酸素血症を説明することはむずかしいと考えられる⁴⁾。また肺胞壁でのガス拡散障害を起こすような肺間質の線維化、肺胞壁の肥厚は肝硬変症例において形態学的に証明されていない⁵⁾。このように、肝硬変症に伴う低酸素血症のメカニズムとして肺内動静脈シャント、末梢気道閉塞、肺拡散障害などが

Table 5 100% oxygen inhalation

	Before	10 min	20 min
pH	7.462	7.443	7.471
Po ₂ (mmHg)	45.2	241.8	262.8
PCO ₂ (mmHg)	32.4	33.9	32.9
O ₂ sat (%)	84.1	99.6	99.7

Shunt ratio=20%

考えられているが、それらのうち肺内動脈シャントは換気–血流の不均等分布を示し、低酸素血症の重要な要因と考えられている。この肺内動脈シャントは^{99m}Tc-MAAによる肺血流シンチグラフィーにより証明されている^{6,7)}。MAAの粒子サイズは20–50 μmで正常肺毛細血管は通過せず肺に補足される。^{99m}Tc-MAAの静注で肺以外の臓器が描出されることで、肺内動脈シャントを証明することができる。

コントラスト心エコー図法は通常マイクロバブルが肺を通過しないことから、主に心臓レベルのシャントの証明に使われてきた⁸⁾。心奇形がなく左心系へコントラストの出現を認める疾患に肺動脈瘻⁹⁾がある。本症例では肺動脈造影からその合併は否定できている。肝硬変症において左心系にコントラストが出現することは今回のわれわれの報告以外に数少ないが、報告はされている^{10,11)}。

今回、コントラストメディウムとして使用したハンドアジテーション法による生理食塩水のマイクロバブルは20–500 μmといわれている¹²⁾。正常の肺毛細血管の内径は約8 μmであるので、正常では左心系へはコントラストは現れない。しかし、本症例で左心系にコントラストが認められたことは、この大きさのマイク

ロバブルが肺内を通過するという証明であり、肺胞レベルの肺毛細血管の拡張が推定される。血管拡張の機序としてはなんらかのvasodilatorが増加し、皮膚・肺内の血管が拡張するともいわれているが、まだ明らかではない。

肝硬変症にみられる肺内動脈シャントの診断としてRobinら¹³⁾は肺動脈造影、右心系血行動態、肺血流シンチグラフィーなどの項目をあげているが、経靜脈的コントラスト心エコー図法はベッドサイドで簡便に直接シャントを証明できる方法と考えられる。肝硬変症の循環系の合併症として古くから高心拍出量状態がいわれているが、肺内動脈シャントがその成因と考えられ、低酸素血症の成因としての重要性と合わせ、肝硬変症患者の循環器合併症として認識する必要がある。

おわりに

低酸素血症を合併した肝硬変症において、その成因が肺内動脈シャントであることを末梢静脈および肺動脈からのコントラスト心エコー図法にて証明した症例を報告した。

要 約

低酸素血症を合併した肝硬変症において、その成因が肺内動脈シャントであることを末梢静脈および肺動脈からのコントラスト心エコー図法にて証明した症例を報告した。

症例は62歳、肝硬変症の男性。動脈血ガスにてPo₂ 46.3 mmHgの低酸素血症を示した。肘静脈からの生理食塩水を用いたハンドアジテーション法によるコントラスト心エコー図法で、左房、続いて左室にコントラストが出現した。いずれの肺動脈からのハンドアジテートした生理食塩水の注入においても左房、左室にコントラストの出現を認めた。肺動脈造影では肺動脈瘻は認められなかった。右心系血行動態では心拍出量が多く、肺血管抵抗は低値を示した。

以上より、本症例の低酸素血症の主たる原因は肺内動脈シャントと考えられた。肝硬変症に合併する低酸素血症の成因の一つに肺内動脈シャントがあるが、コントラスト心エコー図法は本シャントの存在を簡便に証明できる方法であり、肝硬変に伴う低酸素血症の鑑別に有用である。

J Cardiol 1994; 24: 155–160

文 献

- Snell AM: The effects of chronic disease of the liver on the composition and physicochemical properties of blood: Changes in the serum proteins, reduction in the oxygen saturation of the arterial blood. Ann Med 1935; 9: 690
- Rydell R, Hoffbauer FW: Multiple pulmonary arteriovenous

fistulas in juvenile cirrhosis. Am J Med 1956; 21: 450–460

- Berthelot P, Walker JG, Sherlock S, Reid L: Arterial changes in the lungs in cirrhosis of the liver-lung spider nevi. N Engl J Med 1966; 274: 271–298
- Ruff F, Hughes JM, Stanley N, McCarthy D, Grun R, Aronoff A, Clayton L, Milic-Emili J: Regional lung function in patients with hepatic cirrhosis. J Clin Invest 1971; 50: 2403–2413

- 5) Schomerus H, Buchta I, Arndt H : Pulmonary function studies and oxygen transfer in patients with liver cirrhosis and different degree of portasystemic encephalopathy. *Respiration* 1975; **32** : 1-20
 - 6) Wolfe J, Tashkin D, Holly FE, Brachman MB, Genovesi MG : Hypoxemia of cirrhosis-detection of abnormal small pulmonary vascular channels by a quantitative radionuclide method. *Am J Med* 1977; **63** : 746-754
 - 7) 加藤 清, 松永敬一朗, 千場 純, 上田明子, 山中功一, 岸井利昭, 福島孝吉, 大秋美治, 北村 均: 多発性肺内動脈瘤により低酸素血症を呈した肝硬変症の一剖検例. *日胸疾会誌* 1982; **20** : 821-826
 - 8) Raymond G, Pravin MS : Ultrasound cardiography : Contrast studies in anatomy and function. *Radiology* 1969; **92** : 939-948
 - 9) Lewis AB, Gates GF, Stanley P : Echocardiography and perfusion scintigraphy in the diagnosis of pulmonary arteriovenous fistula.
 - Chest 1978; **73** : 675-677
 - 10) Shub C, Tajik AJ, Seward JB, Dines DE : Detecting intrapulmonary right-to-left shunt with contrast echocardiography. *Mayo Clin Proc* 1976; **51** : 81-84
 - 11) Hind CRK, Wong CM : Detection of pulmonary arteriovenous fistulae in patient with cirrhosis by contrast 2D echocardiography. 1981; *Gut* **22** : 1042-1044
 - 12) Feinstein SB, Shah PM, Bing RJ, Meerbaum S, Corday E, Chang B, Santillan G, Fujibayashi Y : Microbubble dynamics visualized in the intact capillary circulation. *J Am Coll Cardiol* 1984; **4** : 595-600
 - 13) Robin ED, Horn B, Goris ML : Detection, quantitation and pathophysiology of lung "spiders". *Trans Assoc Am Physicians* 1975; **8** : 202-216